

# 育児に対する意識について

## 父親の育児関与から考察する

中畑美早紀

(橋本尚子ゼミ)

### 問題と目的

最近では、幼児虐待の事件や、今年の流行語の一つである「イクメン」といった子どもや子育てに関係するニュースや雑誌などが多く見られる。2010年7月31日に大阪で起こった、二人の子どもを置き去りにした事件(朝日新聞)。2010年9月10日広島で起こった父親がした虐待に対して母親は何も助けずに死なせてしまった事件など(産経新聞)。これらのような虐待の事件の理由として、「女として生きたい」や「最近夫が相手してくれない」など個人的な理由をテレビや雑誌で多く耳にする。「イクメン」では、父親の積極的な育児サポートや子どもの世話をするイクメンパパを指したもので、夫の子育てや育児参加が世間に浸透してきている。インターネットによると、妻の「イクメンパパ」に対する意識調査では、「子どもの相手をしてくれる」(90.8%)「ぐずっている子どもをあやしてくれる」(84.8%)「お風呂に入れてくれる」(80.0%)といった家事手伝いをしてくれる夫よりも、父親ならではの子ども関わり方を望んでいる母親が多く見られた。このように現代では、育児休暇や立会い出産など妻へのサポートや子育てに対して積極的な夫の存在が重要になっている。妻自身も子どもに対しても大切に考えてくれる夫が理想的な家庭像になってきているようだ。昔ではあまり見かけなかったが、最近では父親と子どもだけで散歩やお買い物に出かけている親子をよく見かける。この時母親の姿はないが父親と子どもだけで過ごすということが少しずつ増えてきているのかもしれない。このような違いによって母親と子どもとの関係にどのような違いが出るのかを問題とした。

本調査では、夫婦関係だけでなく父親の具体的

な育児参加、父親と子どもの関係性、母親の女性的な意識の関連性、住宅形態、子どもの数などがどのように影響するのかを検討する。子育てにおいて夫の育児参加が浸透していく中で、夫の育児に対する捉え方が変化し、子どもと直接関わる機会が増えている。「母親のアイデンティティの発達には自己犠牲的に子育てに専念するのではなく、自分らしさを確認する時間の確保や活動の実践の必要がある」と岡本は母親の育児ストレスについて指摘している。拡大家族が減少し核家族化が進み、おじいちゃんやおばあちゃんなど身近な人に頼る機会が減っていく中で、妻の自分自身の時間の確保を得るために夫の育児参加は増えているのだろうか。夫によって母親と子どもとの間に余裕を持たせることで母親自身も余裕が生まれ、子どもとの関係が良いものとなるのか、父親と子どもとの関わりが積極的なものか、消極的なものなのかの違いによって、母親の子どもに対する考え方や関わり方にどのような影響が出るのかを検討したい。

### 愛着の形成

愛着とは、精神分析家のJ.ボウルビーによって提唱された概念で、子どもと養育者との間に形成される情緒的絆のことで、相互依存的社会生活を営んできた人間の本質的要求の一つである。この愛着の基礎は乳幼児期や幼児期に形成される一つで、微笑んだり、声を発するといった信号行動、抱きついたり、後を追うといった接近行動、母親がどこにいるのかを目で追ったり、声のする方を向くといった定位行動があり、愛着行動には4つの段階が存在する。第一段階では、誕生から生後3か月に起こり、誰に対しても視線を向けたり、声を発したり、手を伸ばしたりし、どんな人物か

ら働きかけても、喜びや興味を示すような人に対する無差別な反応。第二段階では、生後3か月から生後6か月の間に起こる日常生活でより関わりのあった特定の養育者に対して、第一段階に見られた行動を多く示すようになる、熟知した人への愛着反応の集中化。第三段階では、生後6か月から3歳にかけて起こる、特定の養育者に対する愛着が明確になり、接触行動や後追い行動など具体的な愛着行動にも顕著になるが、見知らぬ人には恐れたり警戒したりするといった人見知りが見られる。この不安を解消するために養育者が心理的な安全基地となり、積極的な近接の追求。第4段階では3歳から児童期の終わりにかけて起こり、愛着対象の感情や動機の洞察が可能になり、母親などの行動を洞察できるようになるため、必ずしも身体的な接触や確認行動がなくても子どもは安心していられるようになるため協力する行動がとられていく。このように子どもの成長には愛着行動が必要なのである。愛着行動の発達は母親の対応や子ども自身の気質によって左右される。乳児期から5歳までの子どもには母親の愛着というものが重要であり、子どもは親の愛着の影響を受け、他者とのコミュニケーションへと発展していく。

母親の愛着の要因に関して、R.エムディは、乳児が母親に向けて表出する情緒に適切に対応する母親の能力である情緒的対応性が一貫して適切な形で示されると、愛着は健全に発達されるとされ、子どもの空腹などの状態に適切な応答や子どもの接近や微笑みに対して一貫して肯定的に応答することで、安定した愛着の発達を促すことができる。しかし、子どもからの働きかけに対して適切でない応答をしていると、子どもは母親の行動を予期しにくく、安定した愛着の形成は難しくなると言われている。この愛着行動は子どもだけでなく母親自身に対しても自信や責任感等を持たせ、親としての自覚を形成するなど、母親としての発達にも必要なのである。サイモンズは、親の養育態度が子どもの性格形成に影響し、家族関係や親子関係にも影響されると述べている。このように子どもと母親は密接した関係なのである。

#### 子育てについて

現代では子育てをする際、父親、母親関係なく

育児休暇をとることが可能になっている。初めて子どもを産むことは「無免許運転」をしているようなものであると(汐見, 2000)が言うように子どもを育てることは試行錯誤の連続で、子どもの発達に伴って親自身も成長しなければならない。2人目や3人目の子どもを育て、子育てに慣れていくと感じられる親にとっても子育ては困難なもので、負担を感じるケースがある。子育ては長期にわたり、多大な時間と労力と費用が必要なのである。「子育てとは親にとっては子どもの発達とともに常に新しい課題に直面する一回限りの生成的な過程である」(林, 2006)ことが指摘されるように失敗してもやり直しがきかず、途中でやめることができない一回限りのものである。子育てを動物界で見ると、「大抵の場合は精子の提供だけで、父親はすぐに去っていく。しかし、育児困難な場合の動物は父親も協力し子どもを育てるのである」(柏木, 2008)。このように人間の場合、歩く、言葉を発する、話す、書く、考える、道徳を知り、自分の価値観を持つなど長期的でかつ課題が多い。近年では核家族化が進み、周りのネットワークのない状態にいる母親と子どもにとってはとくに、父親の存在が必要不可欠なのである。厚生労働省の行政事業の育児促進や「イクメン」といったプロジェクトによって父親の子育てが浸透してきていることもあり、行政上は少しずつ育児の負担が分散されてきている。しかし、現実では、父親の育児休暇を使っている人は少なく、母子家庭の場合では負担を軽減することが難しい。

#### 母親の子育て

現代では、非婚化や晩婚化、離婚の増加、少子化が急速に進み、子どもを持たないカップルは少なくない。こうした背景の一つには、日本社会が男女平等に雇用することで、女性が自由に働くことができるようになったこともあろう。このように女性のライフスタイルが大きく変わることで、女性自身も自分自身の地位を確立できるようになり、母親として子育てに専念し、子育てで一生を終えることが大半を占めた時代とは大きく変わってきている。このような状況の中で育児に不安を抱えている母親は多いようだ。柏木(2008)によると、働いている母親は子どものための時間があま

り取れずデメリットになりがちだと思われるが、むしろ働いていない母親が仕事を両立している母親に比べて、育児に不安を抱えているようだ。この理由としては「子育てを終えた後ちゃんと仕事に就くことができるのか」など、育児に対する不安よりも自分自身に対する不安の方が大きい母親が多いからである。育児だけに専念している母親の場合は、「時間がない」や「子どもに自分の時間を取られている」、「ちゃんのお母さんと言われるのが嫌だ」といったような個人的な不安を抱えていると述べている。このように、働いている母親は子どもと離れ、自分の時間を持つことでバランスをとり、子育てに充実感を得ている場合もあるが、働いてはならず、しかし特に仕事復帰を望む母親たちは、社会にいる「自分」にも、母としての「自分」にも、妻としての「自分」の存在の価値も見出そうとしている人が多く見られる。だから「自分」の時間を、子どもに取られていると感じるようである。しかし、昔ではこのような子育てに不安を抱くことはあまりなかったかもしれない。なぜなら、7人や6人といった多くの子どもを育て、寿命も短いので、末っ子を育てあげるまで個々としての人生を考える暇もなく人生を終えるからである。現代の少子化に伴って、子どもを産むのが2人といった数が定着し、その上、機械化や医療の発達に伴い長寿社会になることで、子育てや、自分自身に不安を抱く時間が生まれた。最近の虐待や子ども殺しに母親の「自分の時間が欲しい」といった理由を多く耳にするが、現代の母親は個人としての自分を重視しているようだ。それだけでなく、子育ての負担が母親だけにかかっているという原因により、離婚や子育てを終えてからの職場復帰が難しく、母親が子どもの世話を全面的に担うといったような理想の母親としての期待など、母親側の心理的な負担や経済的負担によって虐待や子ども殺しが起こる場合もある。このように母親の不安要素は、柏木（2006）によると、第一に社会からの孤立感、第二は「自分」の喪失の不安、第三は夫との関係への不満である。育児それ自体への不安よりも自分自身のあり方への不安や焦燥が大きな位置を占めていると述べている。

#### 父親の子育て

父親の育児参加に関して、従来では、子育てや家事は母親に任せ、男は稼いでくるといった家庭が多かった。しかし近年では、父親の育児参加や育児休暇といった言葉が浸透し、子どもと接する機会が増えてきているように思える。しかし、多くの父親は「勤め人」なので、育児休暇をとることは会社からの圧力やリストラの恐怖を目の当たりにすることでもあり、労働基準法を無視して仕事を強いられている。なかには育児に積極的に関わりたいが関わることができない父親も存在する。この日本の社会では、子どもの面倒を見るのは母親、父親はあくまで「協力する」立場なのであることが多い。例えば、父親が保育園の送り迎えや子どもの世話をすることに対して、保育士や近所の人々は父親に「育児に協力的」だと誉める。しかし、母親に対しては当たり前のこととして認識されている。父親においても母親と同様に「親」という立場であるにもかかわらず、父親の育児のみが特別なこととして称賛される。父親と子どもだけで散歩や買い物へ行っても「母親はどこにいるのか」と言った目で見られる。このように、「父親と子ども」といったセットよりも「母親と子ども」といったセットの方が世間に定着している。しかし、日本にも父親が育児をしている時代も存在する。汐見稔幸（2006）によると、江戸時代末期から明治時代では父親が読み書きやおむつの取り替え、子どもの遊び相手、仕事といった子どもの世話がなされていた。当時、女性は野良仕事をやりながら家事を行っていたことから子どもをみることは難しく、火もとに小さい子どもを置くような危ないことはできない。家事と育児は両立ができなかった。だから、母親が忙しく家事をしているときの子どもの世話は父親に任せるか、地域社会に委ねるしかなかった。太田（1994）は、「家」の継承に重きをおく社会では、子育てはいわば「公」のことであり、女を指導して良き子育てをすることこそ家の最高責任者たる男の義務であったと述べている。このようにかつては、父親が育児参加することは日本にとって当たり前だったようだ。最近では育児参加の浸透に伴い、父親と子どもだけで散歩や出しが見られるようになったとはいえ、世間や母親自身も「夫は仕事で忙し

いから家事や子育てまでは手が回らない」と考えている人は少なくない。このように、父親と母親の立場は「対等」ではない。しかし、川端 (2006) によると、同じクラスの子どもたちに「くんのお父さん」として認識されて楽しいと述べているように父親自身も子育てを楽しんでいる場合もある。汐見稔幸 (2006) によると父親も母親と同様に子どもに気を配り、子どもに愛着を持ち、母性本能といわれているのは、父親だから母親だからということとあまり関係ないと述べている。岸裕司 (2006) は「母性的な本能」というのは嘘でそれは母親が一生懸命子どもの世話をしていくうちにだんだんと育ち、子どもの命を守りたいという気持ちになる、こうして育ってくる親の愛情であると述べている。このように「母性」が備わっているとされる母親だけが子どもを育てることができるのではなく、「母性」が内面に生まれることで父親も子どもを育てることが可能になるのである。「育児は自分を育てる「育自」でもある」(岸裕司, 2006)。このように母親が子どもとともに成長するのと同じく父親も成長していくのである。

#### 夫婦関係について

子育てをする際に父親が育児に積極的な場合と消極的な場合では、母親の育児に対しての負担の感じ方が違う。育児不安に影響を与えるもう一つの要因に、夫との関係があり、夫と話をしているときの充実感・幸福感を感じるかどうかが育児不安の程度強い関連がある。柏木 (2009) によると父親になるが父親をしない、父親はいるが実際の育児に参加しない場合があるがこうした育児状況は日本の特徴であり、他の国と比べて父親は労働中心の生活時間を送っている人が多い。現代では専業主婦よりも共働きが増えている。「共働きの夫婦にとってはお互いの仕事に割く時間と家族に割く時間のやりくりをめぐる葛藤は避けられない」(A・M・パインズ著 高橋丈司・岩田昌子訳, 2004) としている。このように母親自身も社会の中で父親と同じ立場に置かれるケースも増えている。このような社会の流れと共に、子どもに対する価値観も変化してきている。柏木 (2009) によると、機械化や医療の発達に伴い、子どもを

「授かる」という思想から「つくる」といった考え方が可能になることで、子どもを産み育てる際に「どのように育てるか」や「生活していけるか」など子どもの価値が測られる。このように夫婦間によって子どものメリットやデメリットを考えて子どもを産むことが選択できるようになったと述べている。このようなことから元来のように夫は仕事、母親は家事、育児といったものから、共働きによる育児や、父親の育児参加などの考え方が出てきた。「共働き夫婦が夫は外で仕事、妻は家庭という伝統的な夫婦よりも社会的にも経済的にも有利であるという一方で離婚率も高い」(A・M・パインズ著 高橋丈司・岩田昌子訳, 2004)。

これらのことから子育てにおいて父親のどのような環境状況、経済状況によって、母親が育児に対してプラスに感じるのか、マイナスに感じるのか等の視点も必要であろう。そこで本調査では、経済面、家の状況(戸建て、マンションなど)も含めて、それらが夫婦間にどのような影響を与えるのか、また、母親と子ども、父親と子どもにどのような影響が出るのかを検討したい。

#### 方 法

調査対象 1～5歳の幼児を持つ父親と母親を対象にした。平均年齢は34.6歳(父親35.6歳, 母親34.1歳)であった。全体で88人(父親38人, 母親45人)の回答が得られた。回収率は50%だった。家族構成は90%超える割合で核家族であった。調査方法 11月上旬から12月下旬にかけて保育園に配布し、一旦家に持って帰ってもらい、質問紙と自由記述に回答したものを回収してもらった。母親の育児意識についての質問紙 大日向(1998)が作成した母性意識尺度「親になって良かったと思う」「子育てが楽しい」「子どもに生きがいを感じる」など。酒井ら(2005)が作成した親子間の信頼性感に関する尺度「子どものことを理解している」「子どもに期待してしまう」など。山口(2010)が使用した親アイデンティティ尺度「親としてやっていける自身がある」「子育てが楽しい」などを主に使用し、この他に子育てに関するインターネットや雑誌、新聞、テレビによって構成した。

父親用の育児意識についての質問紙 母性意識

尺度を母親の部分父親に変えたものを使用し、親アイデンティティ尺度、親子間の信頼性に関する尺度は母親と同様のものを使用した。この他に母親と同様にインターネットや雑誌、新聞、テレビによって構成した。これらをもとに、母親用の質問紙は、子育て意識尺度、夫のポジティブな関わり尺度、自己希求尺度の因子に分けて項目を作成し、父親用の質問紙は、子育て意識尺度、夫自身の夫のポジティブな関わり尺度、自己希求尺度の因子に分けて項目を作成した。この他に子育てについての自由記述の欄を作成した。

手続き これらを保育園や幼稚園などで父親と母親をワンセットにしたアンケートを配り、質問紙、自由記述を父親と母親の両方に行ってもらった。母親と父親を1組とした夫婦ワンセットの場合、母親だけの場合のアンケートの両方を集計した。

## 結 果

### 尺度構成

分析に先立ち尺度構成のために、母親の育児意識質問紙に対して主因子法、プロマックス回転を用い、探索的因子分析を行った。その結果、4因子構造が得られた。因子パターンを表1に示した。各因子に対し、負荷量の高い項目から尺度を構成した。

母親については、因子1は、「夜泣きが多かったと感じる」「子どもと一緒に成長していっていると思う」（逆転項目）「子どもと二人きりは気まずい」「子どもが欲しがらるものを買ってしまう」「子どもが懐いてくれない」などの項目があり、子育てにできるようにネガティブな感情を表していると考えられ、子育てに対するマイナス意識尺度と命名した。因子2は、「夫は育児に参加していると思う」「夫がいると安心する」「夫は子どもをお風呂に入れてくれる」「夫は子どもの世話に積極的だ」「夫に愛されている」などの夫の積極的な関わりを表しているものと考えられ、夫のポジティブな関わり尺度と命名した。因子3は、「母親になってもおしゃべりはしたい」「母親になっても女として見てほしい」「自分の時間が欲しい」「夫婦だけで出かけたいと思う」「夫に愚痴を聞いてほしい」など母親としての役割以外のあり方を求めるものを表しており、自分であること、女性

であること希求するものであると考えられるので、自己希求尺度と命名した。因子4は、「親としてやっていける自信がある」「子どもといることが苦痛だ」（逆転項目）「子どものことを理解していると思う」「子どもに生きがいを感じる」など子育てにできるようにポジティブな感情を表していると考えられ、子育てに対するプラス意識尺度と命名した。

父親については、データ数が少なかったために、因子分析を行わず、母親の因子構造をもとに項目を選定した。母親と同様に、因子1は、「子供が懐いてくれない」「子どもの世話が楽しい」（逆転項目）「子どもといるとイライラする」「子どもに好かれている」（逆転項目）などの項目があり、子育てにできるようにネガティブな感情を表していると考えられ、子育てに対するマイナス意識尺度と命名した。因子2は、「お乳を与えるとき起きるようにしていた」「排泄の世話をする」「子どもをお風呂に入れている」「子どもの世話に積極的だと思う」などの夫自身の積極的な関わりを表しているものと考えられ、夫自身のポジティブな関わり尺度と命名した。因子3は、「妻よりも子どもといる方が楽しい」（逆転項目）「妻は仕事の愚痴を聞いてくれる」「父親になってもおしゃべりはしたい」「妻に愛されている」「家事手伝いに積極的だ」など父親としての役割以外のあり方を求めるものを表しており、自分であることを希求するものであると考えられるので、自己希求尺度と命名した。因子4を子育てに対するプラス意識尺度とし、「子どもを理解している」「子どもといることが苦痛だ」「親としてやっていける自信がある」など子育てにできるようにポジティブな感情を表していると考えられ、子育てに対するプラス意識尺度と命名した。

逆転項目として「子どもと一緒に成長していっていると思う」「子どもといることが苦痛だ」「子どもの世話が楽しい」「子どもに好かれている」「妻よりも子どもといる方が楽しい」などとした。この他に、夫以外のサポートの満足度（母親のみ）、サポート満足度（夫婦相互）、居住形態はフェイスシートに載せた。

これらの最終的なアルファ係数は、子育てに対するマイナス意識尺度、夫のポジティブな関わり

## 育児に対する意識について

尺度、自己希求尺度、子育てに対するプラス意識尺度について父親と母親に対してそれぞれそれぞれアルファ係数を算出したところ、父親は子育てに対するマイナス意識尺度では (.78)、夫のポジティブな関わり尺度では (.74)、自己希求尺度 (.7) では、子育てに対するプラス意識尺度では (.72) であった。母親は子育てに対するマイナス

意識尺度では (.71)、夫のポジティブな関わり尺度では (.84)、自己希求尺度では (.69)、子育てに対するプラス意識尺度では (.80) であった。

## 記述統計量

各尺度、変数の平均値、標準偏差、および変数間の相関係数を表2に示した。各尺度得点は、尺

表1 因子パターン

	因子1	因子2	因子3	因子4	
2 子どもと二人っきりは気まずい	.669	-.324	.175	.176	
13 子どもが懐いてくれない	.628	.008	.185	-.069	
27 夜泣きが多かったと感じる	.584	.291	-.232	-.396	
29 子どもが欲しがるものを買ってしまう	.522	.043	-.124	.082	
31 子どもと一緒に成長していると思う *	.412	-.198	.264	-.178	
21 夫は育児に参加していると思う	.250	.877	.087	-.044	
32 夫は子どもをお風呂に入れてくれる	-.022	.765	.037	-.144	
33 夫がいるとい安心する	-.167	.728	.077	.158	
37 夫は子どもの世話に積極的だ	.017	.622	-.070	.048	
40 夫に愛されている	-.146	.567	.060	.205	
6 自分の時間が欲しい	-.137	-.223	.737	.057	
7 夫婦だけで出かけたいと思う	-.043	.368	.567	.099	
15 母になっても女として見てほしい	.137	.146	.494	.037	
19 母になってもおしゃれはしたい	.262	.161	.382	.293	
25 夫に子どもの愚痴を聞いてほしい	.061	.106	.370	-.117	
10 親としてやっていける自信がある	-.048	-.026	-.011	.826	
12 子どものことを理解していると思う	.027	.083	.243	.763	
18 子どもに生きがいを感じる	.325	-.012	-.581	.647	
30 子どもといることが苦痛だ *	-.227	.088	-.162	.535	
因子相関	因子1	因子2	因子3	因子4	
	因子1	-	-.206	.277	-.292
	因子2		-	.029	.412
	因子3			-	-.259
	因子4				-

\*は逆転項目である

表2 各尺度の平均値と標準偏差, および尺度間の相関係数

		<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6
1	子育てに対するマイナス意識	4.14	0.80	-					
2	夫のポジティブな関わり尺度	2.21	0.89	-.25 *	-				
3	自己希求尺度	2.41	0.77	.10	.16	-			
4	子育てに対するプラス意識	2.34	1.02	-.41 **	.16	-.13	-		
5	夫以外のサポートの満足度 (母親のみ)	1.46	0.83	-.11	.16	.16	.23 *	-	
6	サポート満足度	2.57	1.25	-.16	.60 **	.12	.19	.04	-

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ 

度に含まれる項目の評定値を合計し、項目数で割り算出した。

#### 相関係数について

父親と母親とでは、子育てに対する意識がどのように変わるかを子育てに対するマイナス意識、夫のポジティブな関わり、自己希求尺度、子育てに対するプラス意識のそれぞれの関係性を見るために、父親、母親別に変数間の相関係数を算出した。各尺度の平均と標準偏差、および尺度間の相関係数を表2に示した。その結果、母親においては、子育てに対するマイナス意識と子育てに対するプラス意識の間に、弱い負の相関 ( $r = -.41$ ,  $p < .05$ ) が、夫のポジティブな関わりと子育てに対するマイナス意識の間に弱い負の相関がみられた ( $r = -.25$ ,  $p < .05$ )。また、サポート満足度と、夫のポジティブな関わり ( $r = .60$ ,  $p < .001$ ) の間に正の相関がみられた。サポート満足度と子育てに対するプラス意識 ( $r = .329$ ,  $p < .05$ ) の間に正の相関がみられた。サポート満足度と夫の収入満足度 ( $r = .33$ ,  $p < .05$ ) の間に正の相関がみられた。

父親においては、子育てに対するマイナス意識と子育てに対するプラス意識の間に中程度の負の相関 ( $r = -.56$ ,  $p < .001$ ) がみられた。また、自分以外からのサポートに対する満足度は子育てに対するプラス意識と正の相関がみられた ( $r = .40$ ,  $p < .05$ )。また、自分自身のサポートに対する満足度は、子育てに対するマイナス意識と負の相関が ( $r = -.37$ ,  $p < .05$ )、夫のポジティブな関わりと正の相関 ( $r = .39$ ,  $p < .05$ ) がみられた。

#### 夫婦間の育児に対する意識の差について

4因子の尺度について、父親と母親間に差があるかを検討するために *t* 検定を行った。父母別の平均値と標準偏差、育児関与に対する意識の差を表3に示した。その結果、夫のポジティブな関わり ( $t(73) = 2.22$ ,  $p < .05$ ) と子育てに対するプラス意識 ( $t(73) = 4.00$ ,  $p < .001$ ) において有意差がみられた。夫のポジティブな関わりにおいては父親が母親よりも高く、子育てに対するプラス意識においては母親が父親よりも平均値が高かった。

#### 夫婦単位の分析

居住形態と子どもの数が、夫婦間の育児に対する意識の差に影響しているかどうかを検討するために、子育てに対するマイナス意識、夫のポジティブな関わり、自己希求尺度、子育てに対するプラス意識のそれぞれ、夫からのサポート満足度、夫以外からのサポート満足度の夫婦間の差を算出した。これらの変数を従属変数として、居住形態(戸建て・集合住宅)×子どもの数(1人・複数)の被験者間二要因の分散分析を行った。居住形態と子どもの数別の夫のポジティブな関わりを図1に、居住形態と子どもの数別の子育てに対するマイナス意識を図2に示した。その結果、子育てに対するマイナス意識については、居住形態と子どもの数の交互作用が有意傾向で ( $F(1,26) = 4.08$ ,  $p < .10$ )、夫のポジティブな関わりについては、居住形態の主効果 ( $F(1,26) = 4.49$ ,  $p < .05$ )、子どもの数の主効果 ( $F(1,26) = 5.30$ ,  $p < .05$ )、居住形態と子どもの数の交互作用が有意であった

育児に対する意識について

( $F(1,26) = 5.10, p < .05$ )。

交互作用が有意であったので、個々の差を検討するためにt検定を行った。その結果、夫のポジティブな関わりにおいては、集合住宅の場合に、子どもの数が複数の群のほうが1人の群よりも夫婦間の意識の差が有意に大きく ( $t(9) = 6.37, p < .05$ )、父親のほうが母親よりも夫のポジティブな関わりが高かった。また、子どもの数が複数いる群において、戸建てに住んでいる群よりも、集合住宅に住んでいる群のほうが夫婦間の夫のポジティブな関わりが有意に大きい傾向があり ( $t(11) = 2.16, p < .10$ )、父親のほうが母親よりも夫のポジティブな関わりが高かった。

交互作用が有意傾向であった子育てに対するマイナス意識においても、t検定を行った。その結果、集合住宅の場合は、子どもが一人の群よりも複数いる群のほうが、夫婦間の意識の差が有意に大きい傾向があり ( $t(9) = 2.13, p < .10$ )、複数いる群のほうが母親の子育てに対するマイナス意識が高かった。子どもが複数いる場合は、戸建てよりも集合住宅に住んでいる群のほうが夫婦間の意識の差が大きい傾向があり ( $t(11) = 2.05, p < .10$ )、母親の子育てに対するマイナス意識が高かった。人数が少ないために、あまり強くは言えません。

その他の従属編数 (夫の収入満足度) においては、主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった。

自由記述について、  
子育てに対するプラス意識やマイナス意識が自

由記述にどのように表れるかを検討した。

子育てに対するプラス意識、マイナス意識の両方が高いグループの場合では、「楽しくやっていないといけない」「母親の偉大さがわかった」「毎日よく笑わせられている」などの回答が多く得られた。プラス意識が高い場合では、「かわいいただけでは育てられない」「責任がある」「毎日が楽しい」などの回答が得られた。マイナスが高い場合では、「育児は大変な仕事」「ここまで自分の時間がなくなるとは思わなかった」「収入の不安が家の心配や気苦労やストレスやもろもろに行く」「自分がちゃんとしない子どもは育たないと思う」「しんどい時もある」「最初は不安だった」「思い通りにならない」などの回答が得られた。しかし、「子ども共に成長している」「自由に育ててほしい」「色々経験させてもらっている」「子どもに励まされる」などプラス意識に感じられる回答も得られた。子育てに対するプラス意識、マイナス意識の両方が低いグループでは、「育児の大変さ」「泣きやまなくて不安だった」「子どもと共に成長する」などの回答が得られた。しかし、全体的に子育てに対するプラス意識、マイナス意識、その両方が高い場合、低い場合の回答にはあまり違いは見られず、回答数も多く得られなかった。

考 察

の結果から、まず母親において、子育てに対するマイナス意識と子育てに対するプラス意識の間に、弱い負の相関があることから、子育てに充実感を得ているほど、子どもの世話や子どもに対

表3 父母別の平均値と標準偏差, t検定結果

	母親		父親		t(73)
	M	SD	M	SD	
子育てに対するマイナス意識	4.11	0.79	4.17	0.82	.33
夫のポジティブな関わり尺度	2.01	0.97	2.46	0.74	2.22 *
自己希求尺度	2.29	0.78	2.55	0.73	1.51
子育てに対するプラス意識	2.73	1.08	1.87	0.71	4.00 ***

\*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$

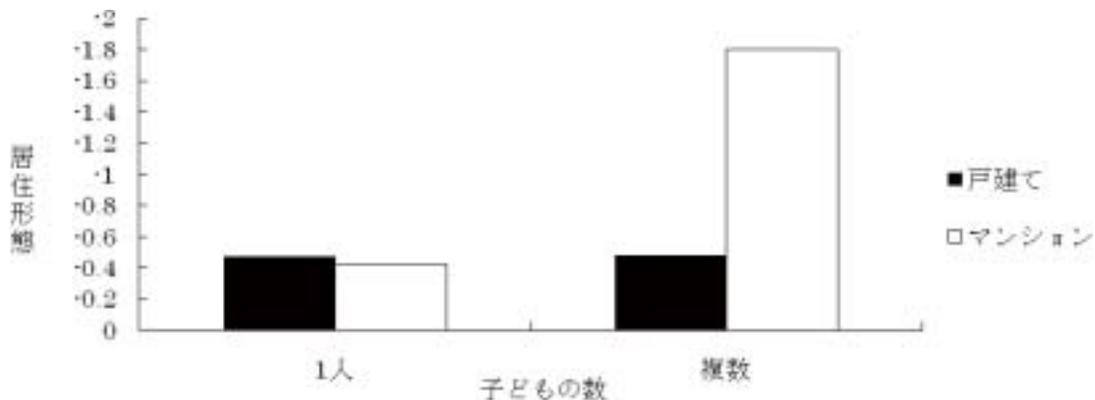


図1 居住形態と子どもの数別の夫のポジティブな関わり

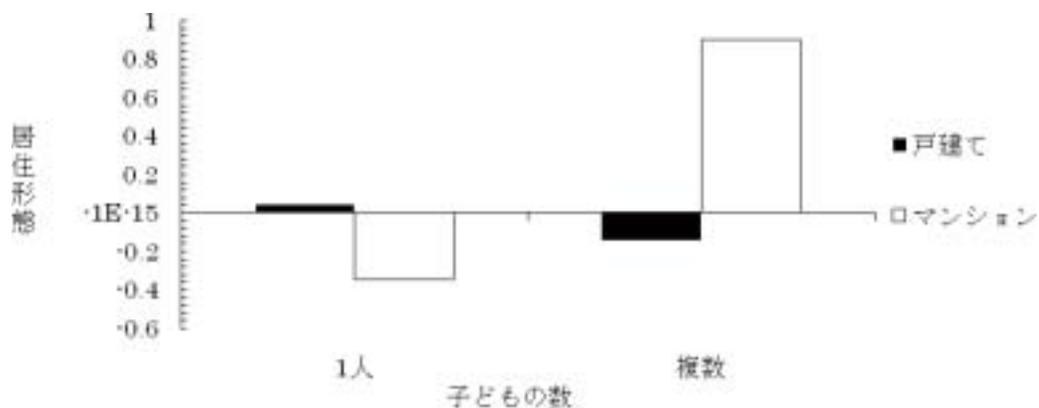


図1 居住形態と子どもの数別の子育てに対するマイナス意識

して負の感情を抱きにくく、子どもとの関係に良い影響を与えている。夫のポジティブな関わりと子育てに対するマイナス意識の間に弱い負の相関がみられたことから、先行研究でも言われているように、父親の育児関与が母親と子どもとの関係に良い影響を与えているといえる。父親が育児に対して積極的なほど母親自身も安心して育児にとり組めるようだ。サポート満足度、夫のポジティブな関わり、子育てに対するプラス意識と夫の収入満足度との間に正の相関があることから、母親は夫の収入に満足している程度が大きいほど、夫が育児に関与していると捉えており、夫の育児のサポートに対して満足感を得ているといえる。収入への満足度、また夫のサポートに満足するほど、子育てに対しても親としての自信につながっている。

父親においては、母親と同様に子育てに対するマイナス意識と子育てに対するプラス意識の間に

中程度の負の相関があることから、子育てが楽しいと感じているほど、子どもの存在に負担を感じにくいようだ。しかし父親は母親よりもこの相関が強いことから、父親は少しのことで良くも悪くも左右されやすいといえるのかもしれない。自分以外からのサポートに対する満足度は子育てに対するプラス意識と正の相関がみられたことから、父親は自分がサポートが得られていると感じているほど、父親としての負担が軽減し、子育てに対して重荷に感じず取り組めるようだ。父親自身がサポートできている満足度は、父親の子育てに対するマイナス意識と負の相関があるように、父親自身がサポートできていると認識する場合には、父親は子育てにネガティブな意識を持つことが減る。の結果から、夫のポジティブな関わりと子育てに対するプラス意識において有意差がみられ、夫のポジティブな関わりにおいては父親が母親よりも高かったことから、父親は世間の育児参加に

伴い、少なからず父親の育児関与に対して意識していると示唆される。しかし、有意差があったことから、夫がポジティブに関わっていると思うほどには母親には感じられない可能性がある。子育てに対するプラス意識においては母親が父親よりも平均値が高かったことから、多くの母親は父親よりも育児に対して充実感や満足を感じていることが示唆される。

の結果から、夫婦間の育児に対しての意識の差について、子育てに対するマイナス意識は、居住形態と子どもの数の交互作用が有意傾向にあった。夫のポジティブな関わりについては、居住形態の主効果、子どもの数の主効果、居住形態と子どもの数の交互作用が有意であったことから、近所の育児に関する各家族の情報が得やすく、漏れやすい状況に位置していることで、戸建てよりも状況を比べやすいと示唆される。夫のポジティブな関わりの個々の差の検討を行ったところ、戸建てよりも集合住宅の方が、かつ子どもの数が1人の群よりも複数いる群の方が夫婦間の意識の差が有意に大きく、父親のほうが母親よりも高かったことから、父親は、集合住宅でありかつ子どもの数が増える場合に、より育児関与するようになると示唆される。子育てに対するマイナス意識の個々の差の検討を行ったところ、戸建てよりも集合住宅の方が、かつ子どもの数が1人の群よりも複数いる群の方が夫婦間の意識の差が有意に大きい傾向があり、父親よりも母親の方が高かった。このことから、集合住宅で、母親は、子どもの数が増えることで子育てにマイナスなイメージを持ちやすくなることが示唆される。近隣住人への配慮や迷惑をかけることへの心配があるのかもしれない。

自由記述の結果から、子育ては「楽しい」を感じるよりも不安やストレスを感じている親たちが多いことがわかった。父親においては子育てに対するマイナス意識の点数が高く、「自分の成長」や「責任感」などの回答が多かった。母親に関しては子育てに対するマイナス意識の点数が高いものは多いが、子育てに対するプラス意識と子育てに対するマイナス意識の両方の点数が高いものも多く、父親と同様に「自分の成長」といった回答も多かったが子どもとの具体的な「イライラ」や「不安」、「楽しさ」、「励まされる」などが多く見

られた。このことから、母親は父親よりも子どもと直接接していることが多いとわかる。世間では父親の育児参加が浸透しているように思われるが実際は具体的な父親の育児参加は難しい状況にあると示唆される。

## ま と め

父親の育児参加によって母親は育児に対して積極的に考えられるようになることがわかった。母親は父親の育児関与への意識が高くなるか低くなるかによって育児に対してプラスにも、マイナスにも左右されている。母親における夫への収入満足度が高いか低いかが、夫のポジティブな関わりや子育てに対するプラス意識にも関連していることがわかった。母親は夫の収入に満足感を得ているほど夫に対して育児関与について、よりよいイメージを持つということであり、夫の収入満足度が母親の育児に対するプラス意識に影響を与えていると考えられる。そして、父親も母親も同様に子育てに対して良いイメージが大きくなるほど子育てに対して悪いイメージが減っていくが、父親は母親に比べて少し強めの傾向があった。夫自身は自分が育児に対してサポートしているという満足度が高いほど、育児に対してプラスイメージを持つといえる。そして、父親は自分以外のサポートを得ていると思うことで育児に対して安心感が生まれると考えられる。集合住宅に住んでいる夫婦の母親よりも父親の方が子どもの数が増えるほど子育てに対して負担が大きくなる。核家族が多い現代は、父親のサポートの重要性が高く、父親以外のサポートを得にくい環境にいることから、父親は自分自身がポジティブに関わらねばならないという社会によるプレッシャーのようなものを少なからず感じているのかもしれない。

## 今後の課題

育児に対してのプラス意識や夫のポジティブな関わり、育児に対してのマイナス意識には関連があることがわかった。しかし、育児への意識は、収入満足度や居住形態、サポート満足度との関係も深いことも見出された。母親自身の、自分の時間の確保によって育児に対しての意識のあり方が左右されるように思っていたが、父親のサポート

がより重要であることが見出された。また、父親自身も育児に対して、育児のサポートの価値を多少意識していると示唆された。「育児休暇」や「育児参加」が浸透してきているのだろうか。しかし、集合住宅のどのような要因で、子どもが増えるとともに育児に対してマイナス意識が高くなり、夫のポジティブな関わりが高まるのかは、今後さらに検討を必要とする課題である。また、今回の研究では質問紙の集計数や自由記述についても回答数が少なかったため、今後は、質問紙、自由記述についてより多くの回答を得て分析することが必要であるといえる。

### 引用文献

- 塩崎尚美・無藤隆 (2006) 幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因 発達心理研究 第17巻 第1号 39 - 49
- 林昭志 (2006) 親を生涯発達の観点から捉える試み 乳幼児期の親の発達について 上田女子短期大学紀要第二十九号 1 - 9
- 森下正康 (2006) 幼児の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング(2) 父母の態度のパターンによる分析 和歌山大学教育学部紀要 教育科学 第56集 33 - 42
- 柏木恵子 (2008) 子どもが育つ条件 家族心理学から考える 岩波新書
- 尾形和男 (2007) 家族システムにおける父親の役割に関する研究 風間書房
- 川端裕人・岸裕司・汐見稔幸 (2006) 「パパ権」宣言！ お父さんだって子育てしたい 大月書店
- 宮崎正明・富永ちはる (2007) 父親の子育て態度と家族システムに関する研究 FACES でみる現代家庭の特徴 長崎大学教育部紀要 教育科学 第71号 23 - 38
- 戸田まり (2009) 親子関係研究の視座 The Annual Report of Educational Psychology in Japan 2009 Vol.48, 173 - 181
- 佐藤千晶 (2008) 産後5か月の母親・父親の子育てに関する意識と生活時間の事例分析 パートナーシップと関わりで 生活機構研究科紀要 Vol.17 170 - 180
- 山口雅史 (2010) 母親になるということ 母親のアイデンティティを巡る考察 あいり出版
- マジェラー・キルキー著 渡辺千篤子 訳 (2005) 雇用労働とケアのはざままで 20か国母子ひとり親政策の国際比較 ミネルヴァ書房
- 谷田征子・青木紀久代 (2009) 母親からみた夫婦間の相互性と子育てに対する感情との関連 臨床心理学研究 Vol.27 No.2 pp.152 - 162
- 太田素子 (1994) 江戸の親子 父親が子どもを育てた時代 中公新書
- 藤崎真知代・本郷一夫・金田利子・無藤隆 (2002) 育児・保育現場での発達とその支援 ミネルヴァ書房
- A・M・パインズ著 高橋丈司・岩田昌子訳 (2004) 恋愛と結婚の燃えつきの心理 北大路書房
- 牧野カツコ (2005) 少子化家族のなかの育児不安 子育てに不安を感じる親たちへ ミネルヴァ書房
- 中田照子 (2005) 国際比較：働く父母の生活時間 育児休業と保育所 御茶の水書房